

〈資料〉

Cooper, R. and G. Burrell, "Modernism, Postmodernism and Organizational Analysis: An Introduction", *Organization Studies*, 1988, 9/1.

モダニズム、ポストモダニズムと組織分析（1）

崔 潤 鎔

要 約

この資料は、モダニズムとポストモダニズムの概念規定をめぐる最近の人文・社会科学分野における論争をまとめ、組織分析の観点からのインプリケーションを探ろうとする『*Organization Studies*』誌の稀に見る意欲的な4回企画シリーズを扱う。第1回目当たる本稿では、論争を概観したうえで、両者の対決点がより鮮明に紹介されることになるが、2、3、4回目ではそれぞれフーコー（M. Foucault）、デリダ（J. Derrida）、ハーバマス（J. Habermas）などが挙げられ、モダニズムに対するアンチ・テーゼを標榜するポストモダニズムの問題構成と新たな知的努力というのが伝統的な組織分析の観点にとってどのような意味合いをもつかについて検討する。ポストモダニズムの問題構成に迫る本格的な組織理論からの関心として注目される。

この興味津々な論争は、主にディスクール（情報、知識、コミュニケーションなどの言語体系の秩序）の本質とその社会的機能に焦点を当てている。モダニズムのディスクールは、ベル（D. Bell）、ルーマン（N. Luhmann）、ハーバマスなどの著作のなかに多様に例示されているように、「進歩」、「理性」といった先験的、人間中心的規準に基づいている。一方、ポストモダニズムのディスクールは——主な主唱者としては、リオタル（J. F. Lyotard）、デリダ、フーコー、ドゥリーズ（D. Deleuze）、グアタリ（F. Guattari）などが挙げられる——合理的統制や認識の中心としての「人間主体」を否定し、「パラドックス」や「未確定性」に満ちた人間の社会的関係を分析しようとしている。

この相反するパースペクティブは、組織化プロセスに対する2つの対照的な観点として捉えることができる。モダンの観点における組織は、人間理性を拡張するための社会的手段として捉えられる。また、ポストモダンの観点における組織は計画的思考や計算的行動の現われとしてよりも組織生活の安定を不断に脅かす社会的実体に作用する本能的防御行動として捉えられる。現代組織理論の観点から後者の問題構成がもつ基本含意を検討することがさしあたりの課題である。

1 はじめに

現代の社会科学は再び自己懐疑と自己省察の周期的試練に直面している。自由主義学問伝統において教義的に重んじられてきた「理性」や「進歩」といったモダンのディスクールは極めて微細なところまで新たな批判にさらされるようになった。論争は2つの対立する認識論的立場を中心に二極分化されている。理性的思考の力を通じて完成に向かってたえず自分を改良する人間の根本的な能力についての信念体系としてのモダニズムに対して、ポストモダニズムはその能力を批判的に疑い、モダニズムの排他的合理主義（ethnocentric rationalism）を明白に棄却したりする。このやりとりから近代化の全体プロセスを性急に再評価することはさておいても、そこには現代社会における組織の本質、役割についての認識とかかわって重要な含意が含まれていることが分かる。少なくとも、合理的なシステムの生産に寄与する組織の形成的役割を中心とした既存の支配的な管理経済的機能の組織定義からの逸脱が見られる。これは確かに、現代社会システムの研究を通じてウェーバー（M. Weber）が提起した壮大な関心への回帰でもある。ウェーバーにとって現代の経済秩序は、官僚制組織によって形作られたアイアンケージ（iron cage）であり、その官僚制化のプロセスの重要な効果は神秘的・呪術的世界観を破ったところにある。言い換えれば、ウェーバーの見る現代組織とは社会的日常の客観化と合理化を象徴するプロセスとしての組織であり、今日の論争において再びこのプロセスへ関心を寄せるようになったのだが、それはディスクールの概念と機能についてのわれわれの注意を促す新鮮な旋回でもある。

ウェーバーの分析は、現代の組織分析が見落としてまた1つの重要な観点を捉えている。すなわち、彼の分析の対象になるのは組織それ自体よりも社会的・物理的環境を継続的に支配していくプロセスとしての現代の官僚制組織についてである。合理的な組織化とは、われわれが未だに事実上十分に理解してはいない諸力に対する反応のプロセスであり、その反応においての失敗の連続もまた合理性の連続なのである。事実、ウェーバーの分析における合理性 (rationality) の概念は合理化 (rationalization) の概念へと転移していく。ここでの合理化とは、真実な動機が究明されない行動や思考を理解しようとする際に、論理的首尾一貫性あるいは倫理的受容可能性の形態で提示されるディスクールの一形態としての合理化である。このような合理性においては、その内部作用が隠される場合が多い。それは部分的には‘未知 (unknown)’あるいは‘無意識 (unconscious)’に根拠しているため、それ自体生命のあるものとして現われたり、または人間の直接的な統制の領域を越えた自動性 (automaticity) の形態として現われたりする。このすべてが、現代官僚制組織の展開に対するウェーバーの分析プロジェクトのなかにきちんと組み込まれているのである。

一方、現代組織分析の伝統的な方法論において対象になっているのは、官僚制の論理を組織の具体的な要求に従属させている個別システムとしての組織である。ここで優先されているのは、財貨や所有物の擬似安定的集めの論理としての組織観である。対照的に、ウェーバーの組織の概念は、不安定な構成物としての組織、問題状況に満ちた事柄としての組織である。このようなウェーバーの組織概念の理解は、労働の形式的システムとしての組織性格を何よりも厳格に優先することであり、財貨を生産する能力こそが組織認識において重要であり、なお他の異なる定義を阻む理由である。このような組織認識は、一般に組織は自らの機能と機能化を創出していく傾向があるとの主張でしばしば紹介される自発社会学 (spontaneous sociology) の考え方から出現したものである。

組織分析対象の性質に対するこのような歴史的な置き換えは、組織の2つの一般的な形態についての識別と分析という本稿の課題をよく浮き彫りにしてくれる。1つは、運営の自動性や自律性の側面から説明される組織の形態、すなわち完結された論理的閉鎖としての組織であり、もう1つは、計算的・功利的

意図の側面からの組織形態、すなわち、内容の担保（目標達成）をたえず追求していく組織である。このような二つの組織形態についての認識は、モダニズム、ポストモダニズムのディスクールとの広範な関連、組織の社会科学的含意とかかわってわれわれの注意を喚起させてくれる。

類似した区別が、自然と社会システムの研究のなかに用いられている知識の2つの形態を分析するヴァレラ（F.J. Varela, 1979）からも提出されている。ヴァレラの分析は、組織のサイバネティクス概念におけるディスクールの形態を議論している点から今日の論争に重要な示唆点を提供している（G. Morgan, 1986）。ヴァレラは「自律性」と「統制」という組織の根本的な2つのテーマを見分ける。この2つのテーマはそれぞれ情報と知識という異なるディスクールを伴う。自律性のアプローチにおける情報は、情報が発生する領域における相互作用のプロセス、そして情報を評価する観察者とその共同体の関係（observer-community）とも不可欠に関連している（Varela, 1979: 267）。要するに、自律的な情報とは相互を特徴付ける用語の相互作用のプロセスに他ならない。なぜなら、情報とは独自の特定用語で構成されるのではなく、世界がありのままの単純な形で認識される傾向を否定する機能を果たすからである。一方、統制の情報は指示的（referential）であって（一式の用語のセットを調和との関連性に従って他のセットへと再構成する）、固定された相互作用の観点と観察者の立場を制限する。また、統制の情報は、例えば、特定の目的とかかわっていかなる行動を取るべきかを規定しているとの点からして啓蒙的であり、情報／知識システムの構築と維持に寄与する観察者の役割について傍観的である。

モダニズムのディスクールは言語を、事物を表現する手段として認識している点から、指示的である。さらに、精神の弁証法とか、意味の解釈学、理性及び労働主体の解放、富の創造といった「巨大物語（grand narrative）」によって個別的なディスクールを包摂、正当化しようとしているという点と関連して、モダニズムのディスクールはメタディスクール（metadiscourse）でもある（Lyotard, 1984）。これは先験的な存在、先験的決定、あるいは、しばしば超歴史的・普遍的内容を前提にしている。疑問に対する答えはアプリオリに存在するのである。疑問に先行する答えが前提されているということは、啓蒙的であ

ることを意味するし、またなお先験的な知識が仮定されているということは全体主義的・統制的観点であるとも言える。

ポストモダンのディスクールは、システムは人間の統制から基本的に独立的な、それ自体の生命力を持っているとの観点から出発している。システムはただ自らを表現しているのみであり、われわれはただ単に、システム自身の自己言及的 (self referential) 作用を分析することを通じてのみシステムを理解することができる。ポストモダニストにとって、システムは (人間のための) 意味あるいは目的を持つものではない。すなわち、世界はただ人間のために存在している、物事の統制の中心は人間であると無批判的に仮定する人間の主観の投射 (human projections) のみがあるだけである。世界は基本的に自己言及的であり、人間びいきのものでも反人間的なものでもない。世界はそれ自体の世界である。したがってポスト・モダニズムは自己中心的合理性の立場からの人間主体観を拒み、人間と世界との関係を世界についての解釈という観点から観察者と共同体 (observer-community) との関係として認識する。ここでの解釈は絶対的なものでも普遍的なものでもない。

2 モダニズム

モダニズムは、人間が自らを発見する瞬間からはじまる。その瞬間から人間は、もう神あるいは自然の反映物ではない。このような認識の歴史的な起源は、至高の人間特性を理性に求めた18世紀の啓蒙哲学までさかのぼる。カント (I. Kant) によると、理性とは自己決定に及ぼす外部権限の影響を憤然と遮断し、自分の存在を見つめる時、はじめて現われるものである。これは、理性的分別力を開発する批判意識、搾取されている自身が表現できるように自らを元気づける批判意識を意味する。カントの啓蒙的合言葉における「自分の理性を働かせる勇氣をもて (aude sapere)」がこの批判的理性の概念を具合よく表現しているのである。

同じ時期において理性の手段 (expediency of reason) という考え方が、工業化社会がもたらした支配、管理、計画の問題に漸増する関心を寄せていたサンシモン (Saint-Simon)、コント (Comte) といった社会思想家たちによって用い

られている。管理、計画といった組織的思考の基本は、啓蒙哲学においても十分見出すことができるのである。しかし、このような理性の概念の歴史的展開を綿密に検討してみると、理性の本質を自己言及性をもって代替させようとする試みからも明確に見られるように、これは1つの概念上の分裂として理解できる。初期のシステムの思考において理性の概念は、その批判的な特性優位を巨大システムの機能的要求に屈服させる形態として用いられているのである。サンシモンの後継者たちは、広範な鉄道、川、運河のネットワークを通じヨーロッパと東洋の大規模的な人的結合を企てる、地中海システム（*systeme de la Mediterranee*）の青写真を作った。1854年に始まり1869年に完成されたスエズ運河は、この夢の部分的な実現を物語っている。おそらく初めての組織哲学者ともいべきコントは、人間の和合と繁栄の源泉としての産業組織（富の生産のために労働と知識を科学的に結合させた組織）を認識していた。彼の組織理論は全体社会の管理に適用される体系となっているが、マイクロ水準の詳細な専門化の機能についても関心を持っていた。たとえば、政治家、工業家、銀行家などの厳格な役割区分、各都市ごとの適正数などが関心の対象になっている。この時期の機能的な理性の精神は、ゲーテ（J.W. Goethe）によるファウストの性格描写のなかに適切に現われている。全体世界の技術的变化に伴い分別力を欠いた、情熱的な理性、行動的な理性、行為を突出させる理性がそれである（M. Berman, 1983）。初期モダニズムの組織観は、巨大規模の技術システムの必要に応じるための知識の組織であった。1851年のロンドンの万国大博覧会（Great Exhibition）は、このようなビクトリア朝の初期モダニズムの精神が高く謳歌されたイベントでもあった。

要するに、モダニズムの2つの見方が見分けられる。カントの啓蒙のプログラムの伝統からの批判的モダニズム（*critical modernism*）がその1つであり、もう1つは、サンシモン、コントなどによって提示されている理性の手段化としてのシステムのモダニズム（*systemic modernism*）がそれである。システムのモダニズムにおける理性の概念が、「道具的合理性（*instrumental rationality*）」という表現からもよく知られているように、より支配的になっていると思われる。このような事情は、モダン（あるいは後期産業）社会は基本的に知識に依

存する社会であるという点において以前の社会とは区別されるとする ベルのテーゼ (1974) からよく示されている。ベルは最初の本格的なモダン産業として化学産業を取り上げ、この産業において、はじめて科学と技術の密接な結合が求められたという。すなわち、化学的結合 (成分の変換と再結合) を行なうためにはマクロ分子の操作とかかわる理論的知識が必要不可欠であった。後期産業社会において用いられている理論的知識の特性は、その技術家的・システムのな性格によるものであるとベルは把握する。「後期産業社会は、革新と変化を進めるべき目的の下で、また社会的統制を適切に行なうために、知識を中心に組織された社会」(Bell, 1974: 20) なのである。この観点は、理論的知識こそがモダン世界を特徴づける巨大規模システムの複雑性を管理するための唯一の方法論的保証になり得るとする主張へとより洗練されていくことになる。「組織化された複雑性 (organized complexity)」の問題を中心とした後期産業社会の主な社会的、経済的、政治的問題、すなわち、特定の目標の達成のために精巧に調整されなければならない巨大規模システムの多様な相互作用の変数などが重要な課題として着目された。このような議論のなかで新しい知的技術として出現したものが、たとえば、情報技術、サイバネティクス、意思決定論、ゲーム理論、効用理論 (utility theory) などである。これらの理論の中で認識されている技術の特有の機能は、理性的行動を規定するところにあり、また理性的行動を達成するための手段としても技術の機能が認識されている。制約条件やオルタナティブの確実性あるいは不確実性といった性格基準にしたがって、課題は明確に定義される。「確実性の下での制約条件は固定的であり公開されている。危険 (risk) の下での問題状況においては、出現可能な結果の集合が知られ、またそれぞれの結果の発生確率も計算できる。不確実性の下では、出現可能な結果は予測可能であるが、その発生確率は全く知られていない (Bell, 1974: 30)」。このような条件の下で、合理性とはいくつかの競争的なオルタナティブのなかから望ましい結果を産出させる行動を意味する。ベルは、システムのモダニズムにおいて確定性 (determinacy) あるいは確固な土台 (firm foundation) などの重要性が促され、また重んじられるようになった理由を社会的進化とそれを推し進める人間の追求 (human quest) とをもって説明している。

すなわち、社会的進化とは共通の言語と知識の統一を求める人間の追求によって触発されるものであり、人間の追求は、経験様式と理性の範疇によって制限されながら、不変の真理を形成していくという最も優先的な原則（first principle）に従うものだと指摘する（Bell, 1974: 265）。人間の追求と社会的進化は、広範に連動する関係のネットワークを作り出し、またコミュニケーションや輸送の革命的発展によってその関係は次第に深く統合されていて、都市の拡大、組織の巨大化といった制度の規模増大をもたらした。モダニズムによって遂行された最も主要な社会的革命とは、リアルタイムのコンピュータ情報、新しい量的・質的プログラミングなどの新しい知識技術を用いて、まさにこの「スケール」の問題をコントロールしようとする試みであったのである。

ベルは、現代後期産業社会を分析するにあたって、巨大規模統一システム（large-scale unitary system）の概念に加えて、もう1つのパフォーマンス（performance）の概念を取り上げている。彼にとって、後期産業社会を特徴づける要件はサイズよりもむしろパフォーマンスである。パフォーマンスの決定的特徴は、ベルが経済化様式（economizing mode）と名付けている生産性の概念において最も明確に示されている。すなわち、定められた資本の支出あるいは労働の投与を上回る割合の産出を獲得する能力がそれであり、単純化していえば、現代社会はより少ない努力と費用を費やしてより大きな成果の獲得を可能にした社会なのである（Bell, 1974: 274）。したがって、現代企業の重要性は、とりわけ経済化様式において、このようなパフォーマンス観を作り出したところにあり、これは機能合理主義モデルにおける「社会関係の秩序化（ordering social relations）」の理念よりも進んだ認識であるといえる。社会の支配的下部システムとしての企業は、システムのモダニズムのパラダイムの差別性を持つ組織形態である。このような組織の概念は、ドイツの社会学者 ルーマンによって現代社会システムの緊要な要件として確認されている。ルーマンの作業は、ベルにおける発展の正当化のみならず、発展の形式化（formalization）までも試みている。ルーマンの考えは、「新システム理論（new system theory）」としても知られているのであるが、彼は、社会の機能性についての機械システムの理解の下で、批判的理性の主体というカントの観点はすっかり制圧されている

と指摘しながら、システムのモダニズムの不変の合理性の特徴をはっきりさせている。社会は、それ自体1つの巨大な組織である。すなわち、システムの真正な目標、そしてコンピュータのようにそれ自体プログラムを作り出す理性の真正な目標は、投入と産出の全体関係の最適化、言い換えれば、「遂行性(performativity)」なのである(Lyotard,1984: 11)。システムの遂行性には、ベルのパフォーマンスの基準においてよりもより根本的な役割が仮定されている。すなわち、遂行性とは、財貨を能率的に生産する総合的能力であるゆえに、実現と客観化の原則(a principle of realization and objectification)としても理解できる。したがって、これはそれ自体の思想に優先する社会的志向になっている。ルーマンは、後期産業社会において法律の規範性(normativity of laws)が遂行性の正当化(legitimation of performativity)によって取って代わられている状況を説明している。ここでの正当化の源泉は、とりわけ、環境の内・外部の複雑性を減少させることによって環境をコントロールするシステムの能力(コンティンジェンシー理論)に求められていた。ルーマンは、一糸乱れずの訓練制度(disturbance-free apprenticeship)を通じシステムの全体目標と両立可能な個人行動を作り出さなければならないと主張する。管理過程とは、システムの必要と個人の要求を一致させることによって、システムの必要をうまく実行させることに他ならない(Lyotard,1984: 62)。われわれは、サンシモンとコント以後、カントの考え方が完全に否定されるまでに至った長い旅程を検討した。

批判的モダニズムは、システムのモダニズムのサイバネティクスの単一体観点(cybernetic-like monolithism)の反対側に位置する。現代社会科学においてその代表的な主唱者は、啓蒙的合理主義の精神を蘇生させ後期モダニズムの再建のプロジェクトを企てる、ハーバマスである。検討の焦点は、再びディスクリブルに戻る。ハーバマスにとって、言語は理性の手段である。あらゆる日常の言語(ordinary language)は、言及されていない事項に対する反動的言及(reflexive allusion)を認める(Habermas,1972: 168)。一連の日常的な言語は、共通の生活世界における自発的な行動から淵源しているものであるゆえに、組織化されたシステムの手段的、計算的言語とは区別される。日常言語としては捉えない行

動も、昔からの託宣のような本能的知恵としての理性の自然な形態の一表現であり、われわれの社会的相互関係を導く役割を果たすのである。このような現代のコミュニケーション的合理性（communicative rationality：支配や強制関係から解放され、合意に基づく主体と主体との間の相互人格的關係）は、システムのモダニズムのディスクールによって抑圧されてきた。ハバーマスによると、日常生活世界のディスクールは、批判的モダニズムの基本をなすものとして、「共同体の言語（language of community：カントによって初めて提示され、その後失踪の危機にさらされていた啓蒙意識をここで再発見することができる）」を通じて行なわれる。さらに、システムの理性によって生活世界が植民地化されている状況と関連して、批判的理性の必要性は過去のどの時期よりも緊急である。カント的理性は、今日ますますその重要性を増している。もうすでに理性は、人間の成熟性をはかる尺度のみではなく、全体化のコントロールを企てるシステムの論理から個人を解放させるための必須的なものになっているのである。

モダニズムのシステムの形態と批判的形態との差別性にもかかわらず（一方は社会的秩序のメカニズムの歪みを、もう一方は、生活世界の解放を企てる）、両者は本来的に理性あるいは普遍的な基盤によって構成される論理的意味の世界に対する信念を共有している。ここには2つの形態が見分けられる。（1）ディスクールのみが、すでに存在しなくなった理性と秩序を類似投影している形態。（2）外部の秩序を認識する思考の主体が存在する形態。システムのモダニズムにおける理性的主体は、それ自体システムとして、動物や機械から見られるように統制やコミュニケーションのディスクールにしたがってサイバネティックに作動する（Wiener 1948）。すなわち、この場合のディスクールは、科学的、数学的技術の適用を通じて把握できる、それ自体の法則を持つのである。このような関連においての理性は、システムの他の構成部分とは区別される、システムの特権的所有物である。一方、批判的モダニズムにおいての思考する主体とは、日常的ディスクールの常識を通じて人間経験の普遍的な調和（universal consensus）にまで達しうる人間個人、より正確には個人の相互作用のネットワークである。ここには、批判的な立場を正当化させる（たとえば、

権限の論理の提供) 統一の概念が前提されている。批判の標的になるのは、この統一を分散させようとするあるいはこの統一の出現の可能性を抑止する、諸力についてである。この問題は、ポストモダニズムの課題からは、メタ・ポジションの正当化として現われる。

3 ポストモダニズム

ポストモダニズムのディスクールを理解するための核心は、差異の概念である。差異とは自己言及性 (self reference) の一形態であり、自己言及性におけるある陳述はそれ自体対立的な陳述を含んでいて、意味のいかなる単純な捉え方も拒否する。たとえば、「地球村 (global village)」のパラドックスからも分かるように、現代の通信技術の発展による世界の拡大という意味は、実際のところ、世界が狭くなったという陳述となる。差異は、それ自体からの分離であると同時に統一であり、実際において人間のディスクールを構成するものであるゆえに (Derrida, 1973)、あらゆる社会的形態に本来的なものである。したがって、ディスクールの中心としての人間主体は、変形 (縮小) 不可能な不確定性の状況に直面している。人間主体は、この不確定性という港湾に無限で止めることのできない超過停泊を余儀なくされている。ポストモダニズムの考えは、このことを明らかに認識しているし、またこの不確定性の探究の前衛に位置しているのである。このような観点から、リオタルはポストモダンのディスクールを不安定性への探究方法として定義する (Lyotard, 1984:53)。彼は、現代科学は不確定性に基づいていると指摘する。量子論 (quantum theory)、マイクロ物理学 (microphysics) などに対しても、世界が自己言及的構造のネットワークで成り立っていることを自らのデータを取り上げ主張しながら、既存の予測可能な、決定論的システム観の修正を要求している。不確実性は的確な知識 (たとえば、統制の強化) によって減少できるものではなくて、正確にいえば、より増大していくのである。

リオタルは、モダニズムの主な2つの立場を正当化する巨大物語に対抗する相当魅力的な権力理論を精緻化する。確定性についてのモダニズムの志向は、一方においては、相互関連的機能因子の機械的調和として現われ (システムの

モダニズムの立場)、もう一方の批判的モダニズムの観点からは、自らを解放させるための人間の連帯的調和として現われているのであるが、両者とも一致を求めている共通性が指摘できる。しかし、現代科学は、収斂の論理とは全く異なる差異と自己言及性の弁証法を基礎に据えようとしているのである。リオタルはこのような現代科学の試みも一致への接近であると把握する。ただ、それは達成不可能な目標である。達しようとするほど、遠くに去っていくように見える。一致は決して到達することのできない地平線なのである (Lyotard, 1984: 61)。社会的行動を引き起こす権力の結集点となるのは、一致ではなく、たえずわれわれの関心を強いる「不一致 (dissensus)」なのである。

ほかの論述 (Lyotard and Thebaud, 1968) の中で、リオタルは、ゲームの概念を媒介にしてディスクールを重視する典型的なポストモダンのアプローチを紹介したことがある。すでに彼は、認知されたルールにしたがって参加者の多様な手段の展開が許容される「言語ゲーム (language game)」としての社会的行動を認識していたのである (Lyotard, 1984)。彼は言語ゲームのアイデアを拡大して「言語的投機 (agonistics)」あるいは「コンテスト」の概念を確立しようとしたのであるが、やがては、社会生活の分析にまで進むようになった。闘争の原則がゲームの原則から逸脱する瞬間、それは人間行動を動機づける力を失ってしまう。したがって、支配と統治というのは、役者の他者による完全な掌握を通じてではなく、恒常的な差異と誘引の状態を維持させることによって、バイタリティーを確保することが大事である。一致の達成は、不一致そのものを拒否することであるゆえに、対立物の破壊と同じである。リオタルに続いて、サムエル・ウェーバー (Samuel Weber) は統一と不統一との緊張関係としてゲームの不一致を説明している (Lyotard and Thebaud, 1986: 113)。この緊張関係は、羨み、嫉妬、憎しみといったあらゆる生活感情を引き起こす日常の、減少不可能な支配力の機能に差異と自己言及性を与える (Lyotard and Thebaud, 1986: 106)。したがって差異は、要素的感情を発生させる一次的エネルギー源であるゆえに、単純な理論的概念それ以上のものである。人間行動は、直接統制以上のある積極性によって触発されるものであると考えられる。個人的あるいは制度的行為とは基本的には、日常の支配力についての反応なのである。しかし、

われわれが拒否できないある日常の支配力によって統制されているとする考えは、モダンの理性的観点とは根本的に矛盾している。モダニズムの理性的観点は、拒否不可能な支配力の発生可能性を慎重に拒みながら、一世紀もかけて、そのためのディスクールを形成してきたのである。組織社会は、人間の社会・経済的関心を薄めることによって、人間の衝動的な感情を純化させようと試みてきた（Hirschman, 1977）。組織化された社会生活の基礎を形成する決定的な動因としての人間の感情は、19世紀の生産主義的経済観の下では見逃されてきたし、学問の領域においても棄却されていた。やがて、感情の研究は、19世紀の専門化された学問の新しい領域として登場するようになった。もはや、それは政治哲学あるいは経済のみに属するものではない（Certeau, 1986: 25）。

モダンの理性の本質に対する様々な観点の根底に据えている考えを理解するためにわれわれはニーチェに戻っていかなければならない。おそらく彼は、ポストモダンの考え方に誰よりも重要な影響を与えた人物であろう。ニーチェにとって、差異をもたらす動因は積極的行動である。それは、たとえば自己言及性のように、自己変換の力を内在しているものであり、劣等な立場をそのまま認め他の積極的行動に従属されていく反応的行動とは区別される。これらの対立する積極的、反応的諸力は、「差異あるいは弁別の術（the art of difference or distinction）」と言われるニーチェの系譜学（genealogy）概念の基本をなすものである（Deleuze, 1983: 53）。系譜学とは、積極的行動の優勢な支配力が、いかにして、反応的行動の劣等な力へ転化していくのかを説明するニーチェの方法論である。しかし、反応的行動は自らの起源が積極的行動であったことを否定する。「差異は出発点から構成されているものであって、転化あるいは変形という形の展開を否定する」ことが反応的行動の特徴なのである（Deleuze, 1983: 56）。したがって反応的行動の観点からは、あらゆる知識とディスクールというのは対象についての単純な表現あるいは言及にすぎないと縮小解釈され、究極的には否定されてしまうのである。人間についての受動的、反応的、否定的概念は、人間の科学の至るところで支配的であったといえる。それで、統一、適応、規制などが人間社会を説明する主なモチーフとして提出されていたのである。

モダニズム、ポストモダニズムと組織分析（1）

もう一人のポストモダンの思想家であるデリダは、差異についてのニーチェの分析の拡大を試みているが、彼は全く予測できなかった方向に向かう。意味と理解とは、自然に、本来的に存在するものではなく、構成されなければならないものであるとする立場の出発点から、彼は、構築の反対プロセスを指す解体（deconstructive）の方法論を提示し、人工物がいかにして社会世界の日常的、当然な構造として受け取られているかを検討している。デリダの目的は、合理性あるいは合理化とは、人間存在の深部にその存在の矛盾（否定）を隠そうとするプロセスに他ならないということを明らかにすることであった。組織化への要請の諸誘引は、あらゆる存在論上のギャップについての認識から説明できる。この論争の余地があるギャップは組織化を通じてカバーできると期待されている。そこでデリダの分析は、制度の構造的特性についてではなく、プロセス的特性に焦点を当てる。彼は、常識世界の構造は、不足、分離などの存在の本来的に多様な特性に対して、統一、同一視、緊急性といった概念を特権的に優先するプロセスの積極的生産のみに一方的に従事していると指摘する。このような特定概念の積極的特権化からは、差異、未決定性の支配力に対する統一、同一視の論理という対立構図の論争の要素が出現する。かつてのリョタルのコンテストの概念においての、非理性、失敗 VS 理性、真実の連携といった対立構図とも似たような形でモダニスト的理性が理解されているのである。

ニーチェの系譜的方法論は、ポストモダニズムのもう一つの特徴を加えている。すなわち、知識は思考の支配力を通じて結果されたものだとする考え方がそれである。先で検討されたように、世界は本来的に存在するのではなく、われわれの反映の一表現に過ぎないのである。それは、知への意志（will to know）の複雑なプロセスの産物である。人間は無知のままでは生きていられないので、世界を秩序化、組織化する。矛盾や両面価値といった非正常の形態は取り除かれるべきなのである。ルーマンのモダンシステムの要件についての認識は、知識需要の緊急性という大規模社会の一側面を捉えていることから、ポストモダニズムの考え方として理解できる。モダニズムにおいて理性的であると認識されているのは、ポストモダニズムの観点からすれば、非正常に対しての正常のディスクールの神聖化の試みに過ぎない。ローティ（R. Rorty）は、このよう

な衝突する説明方式の性向を、彼のシステムのディスクールと教導的ディスクール (edifying discourses) との間の区別を通じて説明している。前者は、日常の行動や信念を正当化し根拠づけようとする目的の下で行なわれるもので、日常の行動や信念を論理的、自然的であるとさえ考えさせる機能を果たす。一方、教導的ディスクールは、すたれた表現方式と態度からわれわれを自由にさせるためのディスクールである (Rorty, 1980: 12)。それは、ディスクールと知識を一面的な機能を遂行するものとして捉えるのではなく、状況的に条件化して (auraticize)、日常のなかでの異質性、反応的行動のなかでの積極的行動などについても認識しようとする方法論である。

そこでニーチェは、積極的行動と反応的行動の対立をめぐる諸力をより詳しく理解するために「身体 (body)」に注目する。ここでの身体は、生物的、社会政治的組織体としての身体である。すなわち、物質性、生きている社会有機体組織の観点からの身体概念であり、社会生活に永久な流動性 (perpetuum mobile) をもたらすものである。身体は自己言及的であって、あらゆる社会的行動はそこから触発され、またその中に帰結されていく。「…動物の身体は、あらゆる象徴的言及性の基盤をなす巨大な中心的土台であり…、物理的身体の幾何学的関係についてのすべての論述は、究極的には言及性の起源としての特定の有限な人間身体に帰結させることができる (Whitehead, 1929: 198)」。このような社会生活の身体の内在性 (immanence of the body) は、一般社会学者からは無視されてきたのであるが、ポストモダニズムの思想家からは広範な批判的テーマとして取り上げられている。その制度的、組織的含意については、おそらくフーコーによって最も徹底的に検討されたであろう (Foucault 1980)。フーコーにとって身体は、単純な生理的構造としてではなく、オーラティックな構造 (auratic structure : 雰囲氣的、状況条件的構造) を持つ場所として捉えられている。すなわち身体は、感情、意志、欲望、失敗、誤りの宿場所であり、永遠な分裂の量が収められている場所なのである。言い換えれば、身体は差異の器官である。

フーコーの研究におけるこのオーラティックな次元は、疎外 (estrangement) の形態として現われる。ここでの疎外の形態とは、通常的、親近なものが全く

新しく見えたり、たまには不穏なものとして把握されたりすることをいう。日常のものを新しい観点から把握するためには、われわれはそれを異質なものとして見る必要がある。たとえば、組織化された常套性の体質から離れて、世界をあたかも初めてのように見る必要がある。それは、思考の規範化された方式からわれわれを自由にさせるためには必修的である。そのゆえ、一般読者の慣例に従う理解を中止させるために、フーコーは突発的なイメージや言葉の修飾を使うのである。たとえば、現代の発明こそが人間の理想であったと仮定されてきたのは、未だに200年も過ぎていないとか、デーミアンのグロテスクな記述は大逆罪となり、18世紀の抑圧的処罰（あるいは法律的暴力）の象徴として、彼の身体は公開的に拷問にかけられ、丸裸にされ、やがてはバラバラに処刑されたとか、現代医学の理想は、そのヒューマニズム的利他主義の起源とは異なり、生物量を管理しようとする国家的関心から発達してきたものであるとか、といった説明方式がそれである。フーコーは、あらゆるディスクールは、象徴主義の本来の異質性を抑圧する固有の検閲的機能を果たすものであると指摘しながら、分析の第一段階はこのようなディスクールの属性を認識することであり、自ら啓蒙の自覚によって目覚めることが重要であるとわれわれの注意を喚起させてくれる。ここでの啓蒙は新しい観点で取り上げられている。カントにとって啓蒙は、合理的なものを指す概念であるが、しかしながらそれは、批判的な思考を標準的に一致させる様式であった。フーコーにおける啓蒙は、たとえば、われわれが合理と意識的思考の範囲を越えるある権力によって捕らわれる場合の、その突然の経験、そして無意識的（自動的）洞察そのものが啓蒙なのである。フーコーはニーチェの系譜学的方法論の受容を通じて、とりわけ、このもう1つの啓蒙の経験を主張しているのである（Foucault 1977a: 139-164）。系譜学は、われわれの世俗的な日常の世界を越えて先験的に存在する、ある純粹で理想的な形態についての探究とは異なる。その代わりに、系譜学者は、理想の本質（ideal essence）、あるいは本質的な真実（essential truths）とは「異質の形態（alien form）」から抽出された偽造物に過ぎないと把握する。いわゆる物事の起源をめぐる議論を通じてわれわれが分かることは、絶対的な状態の再確認ではなく、いまは形骸化しているが、依然として開拓可能だということであ

る。そこで存在しているのが、相違、差異、未確定性などである。したがって、フーコーの系譜学的方法は、リオタルの言語的投機論、デリダの解体の概念に近い。絶対的な本質還元（concept of perfect origin）の観点を否定し、多様な論点の展開が許容されるプロセスを採用しているとの点からそうである。このような理性の観点に対して、ハーバマスは、非合理的（irrational）であるとの観点からフーコー（及びポストモダニスト一般）を批判する。ハーバマスは、絶対的な起源の概念における理性を条件的（conditional）に認める（1984）。彼のコミュニケーション的合理性（communicative rationality）は、まさにこのような理想的な状態を前提しているのである。しかし、ポストモダンの思考の論理は、理性についての多様な理解を許容する。ポストモダンの論理における合理性とは、問題についての解答を発見することではなく、解答を問題化するところに特徴がある。これは、相違こそが人間の構造の根源であるとする系譜学的立場と完全に一致する。解答は問題の臨時的な転化に過ぎないのである。ハーバマスが解答を求め、少なくとも解答に向かって接近していくのに対して、フーコーは、問題を短絡化させる方式、知への性急な要求の表現として解答を認識するのみである。フーコーの分析はつねに、解を提供する思考構造の複雑なプロセスに向かっている。人間の世界において、これは必然的に権力の作用に委ねられている。なぜなら、権力は不一致の投機的論理（agonistic logic）に本来的であるからである。ディスクールは、特定問題の中心に位置している権力の異なる表現に他ならない。権力は、内密で巧みに問題を再構成する方式を通じて、解に先行する。これが、フーコーがなぜ「問題化（problemizing）」にそれほど関心を傾けているかについての理由であり、解についての適切な理解は、問題がはじめの段階でどのように構成されているかに全的にかかっている。多方面にわたるあらゆるフーコーの作業は、例外なくこの問題を扱っている。中世における狂気の問題についての関心の展開、19世紀の病院と専門医の組織から見られる現代医学のディスクールの起源、管理的目的の下で問題を構成する手段として工夫された社会科学の登場、などがそれである。

もはや、ディスクールは世界を表現するための中立的なコミュニケーションの手段ではない。存在するのは差異と自己言及性のディスクールのみである。

もはや、それは人間の組織と能力を拡張させてくれる機能を果たすのではなく、ディスクールそれ自体の自己拡大のみをはかるのである。

4 組織分析

正統的な組織分析の対象となるのは、いくぶん合理的で、首尾一貫性のある特定の構造と目標を持つ制限的な社会システムとしての組織である。このような組織の概念は、人間主体の拡大のための社会的手段としての組織観を正当化するメタディスクールの機能を果たす。それは、人類秩序の理想を具現するために、神の補完的存在 (Freud 1961:92) となった人間によって作られた補助的機関 (auxiliary organ) なのである。ベルにとって、現代の企業はこのような組織観が最も崇拜されている組織である (1974)。なお、組織形態についての認知様式を見ると、たとえば、ヴァレラ (1979) がコンピュータ構造 (computer gestalt) の統制イメージと呼ぶもの、リオタル (1984) における投入-産出比率の最適化のプログラムとしての遂行性のシステム (system of performativity) などに基づいていた。投入は産出に対応されるべきであり、その意味でコンピュータの構造形態は、情報/知識 (ディスクール) を固定的、操作的、指示的方法で採用する組織にとって、準拠モデル (referential model) となる。しかし、ヴァレラは準拠性とは自己言及性の特別なあるいは類似した状態を指す概念であるから、自己言及性のほうがより包括的な概念であると指摘する (Varela, 1979: 265-267)。要するにヴァレラは、組織はより包括的に自己言及性の産物であり、したがって合理的な目的の役割は次第に分解されていく運命にあると把握するのである。

社会科学者が、準拠的観点から社会システム、とりわけ組織を考えることは一般的であるといえる。自分の明示的な目的が社会エンジニアリング的観点からではなく、社会の平凡な理解を求める場合もそうである。そこにはもちろん、その機能的重点が差異と自己言及性の活動を抑圧するところに置かれていたシステムパラダイムについての一定の批判も含まれている (Cooper, 1986)。われわれは、このような抑圧の形態を、「差異化 (differentiation)」の概念を中心としたブラウ (P. Blau) の組織理論から見ることができる (Blau 1974)。ブラウに

とって、差異化とは、分業（専門化）と権限の分化を意味する。彼は、コンピュータ構造の機能的観点（たとえば、準拠的観点）の組織観を前もって前提しているゆえに、「公式組織の基準は、共通目的の達成のために多様で専門化された下部集団の諸活動が調整され動員される手続きがあるかいかにかかっている」という（Blau, 1974: 29）。そこで彼は、差異化よりも専門化と権限のところに強調点を移す。すなわち彼は、統制についての認識を重んじるあまり、静態的な差異（static difference）としての構造の認識に留まることになるのである。差異の積極的本質は隠れているものであって、分析不可能であると考えている。他の大部分の論者と同じく、ブラウも、社会組織における分化と差異化の日常的役割を見逃したまま、組織分析を出発させている。したがって、組織はすでに形成されているものとして認識されるのである。

組織意志決定モデルにおける支配的な規範的、合理的傾向を批判的に検討するマインツ（R. Mayntz）の問題意識もまさにこのイシューを扱っている。規範的、合理的意志決定モデルにおける目標は、組織によって設定され、競争的な代替案からの最適解の選択というステップを踏みながら、追求されていく（Mayntz 1976）。したがって、行動は予め設定された目標あるいは目的によって触発されるのである（Mayntz 1976: 119）。そこでマインツは、実際の組織プロセスは局部的混乱への対応という形態で行なわれると指摘しながら、意志決定分析の手順を裏返す。すなわち、特定の政策決定を含めて一般に組織行動は、特定の抽象的価値がいかに達成可能かについての深思熟考を通じて触発されるのではなく、それよりは、組織行動を抑圧、制限する環境要因によって優先的に誘発されるという（Mayntz 1976: 119）。彼はさらに、組織活動の相互作用的あるいは投機的本質を強調しながら、規範的、合理的モデルの観点とは対照的に、実際のところ決定が個人によって行なわれる場合はめったにないし、それはいつも人々の分業構造の活動ネットワークを通じて抽出されるものと述べている。

マインツは、経済開発、技術研究開発、政策決定論といった様々な研究領域についても類似した批判的観点を適用している（Hirschman and Lindblom, 1962）。彼の主な主張点は、問題に対して先験的に提示される絶対解は存在

しないこと、それから、意志決定は、不確実性、混乱、不均衡をつねに内在している環境に照らして補修的に行なわれるべきであることなどである。理論を不法使用する実践、そして計算的構造、思慮深い行動とは距離のある実際の組織行動は、切迫な危機についての自動的な反応という組織行動の実体を如実に反映しているのである。「準拠性は自己言及性を助長する（Varela 1979）」とヴァレラが言っているように、同じく、合理的統制は自動的に反応するより根本的なプロセスを促進するのみである。要するに、組織は、自己組織的、自動的プロセスなのである。

組織の代替的な認識方法としてのこのような組織観は、社会、組織研究のなかに多方面にわたって散在していることが分かるだろう。システム部分間の分化あるいはその境界に集中されている組織活動に注目するグールドナー（A. Gouldner）の機能的自律性（functional autonomy）の概念は、公式組織の自己言及性についての初期研究として挙げられる（Gouldner 1959）。とりわけ彼は、組織の分化が組織活動の自律性をもたらしたと主張する。なぜなら、組織の部門においては、「分離」と「結合」の相互依存という逆説的な相互作用が行なわれているからである。自己言及性のテーマは、マートン（R. Merton）の社会システムの分析のなかにも表われている。彼は、官僚制の公式的合理性は逆説的にその機能に付随して逆機能も生んだという（Merton, 1968: Ch.8）。すなわち、社会的信念は自己達成の予言的機能を果たすこともあること（Merton, 1968: Ch.13）、意図的な社会的行動は全く意図できなかった結果をもたらすこともあること（Merton, 1968: Ch.8）、などを指摘している。準拠性と自己言及性との間の相互作用についての彼の認識にもかかわらず、自己告白的機能主義者（self-confessed functionalist）としてのマートンの観点は、準拠性に偏向的姿勢を見せる。自己言及性についての十分な理解は課題として残り、やがては空中のなかに分解されていた。これらの社会科学のいくつかの観点からも、相互相反する2つの組織観が浮かんでくる。（1）コントロールモデル：準拠的、指示的であり、コントロールモデルそれ自体が人間合理性の表現として認識される。（2）自律性モデル：自己言及的、過程的（たとえば、固定的でない）であり、外部の統制について自動的、独立的に行動する。コントロールモデル

は、究極的に合理的主体を想定しているところからモダニズムの観点に近い。一方、自律性モデルは、全知の合理的な主体を棄却しているところからポストモダニズムの観点到類似している。

ポストモダンの思考は、あらゆるディスクールは本来的反応性の問題にぶつかり合っていること、そしてこの問題こそが、自律性モデルの実現可能性についての認識論的議論以前の問題であるという洞察から出発している。ハーシュマン (A.O. Hirschman) とリンドブロム (C.E. Lindblom) は、その反応性の問題を合理的行動の補修的 (remedial) 傾向から把握する。すなわち、合理的行動は問題の対象に正面から向かうのではなく、問題の困難を回避していくのである (Hirschman and Lindblom, 1962: 216)。もし、このような診断が学問のディスクールの領域にも適用されるのなら、社会科学におけるポストモダンの方法論の展開には重要な障害が生じる。ポストモダンの分析は、ニーチェの系譜学的方法論とも共にこの問題に直面することになる。すでに検討されたように、系譜学は差異を積極的行動と反応的行動との区別を通じて定義している。積極的行動と反応的行動とは、単純化していえば、バレラの自律性と統制 (Varela 1979) の概念ともそれぞれ対応する概念である。ただ、ニーチェの分析において積極的行動とは知的概念であるよりは権力の源泉としての支配力を指す概念であった。積極的行動は、新しい解釈と志向をもたらしうる自発的、活動的、拡張的諸力の基本的に優越な力であるが、しかし、補修的に機能する反応的行動の対抗力によって純化され、否定されることさえある。

差異を単純な概念的範疇から能動的な力の次元へと代替させる系譜学的方法論は、分離の静態的效果 (static effect of separation) という差異についての伝統的 (あるいは準拠的) な理解 (たとえば、ブラウの差異化の概念) から、相互依存的活動という新しい理解への転換を効果的にもたらした。すなわちそれは、単純な分化から統一の流れへ、孤立した関係から相互関連のプロセスへの転換である。自律システムの明白な特徴は、分化、部門化、分類化などについての本来的な抵抗のところにある。このような観点からすれば、組織は諸力の統一あるいは調和である。この諸力という観点は、今までの専門化された学問 (社会学、心理学、経済学、政治科学、など) とその方法論の適用を通じては

見落とされてきたものである。

参考文献

- Bell, D.(1974), *The coming of post-industrial society*. London: Heineman.
- Berman, M.(1983), *All that is solid melts into air: the experience of modernity*.
London: Verso.
- Blau, P.(1974), *On the nature of organizations*. New York: Wiley.
- Bourdieu, P., and J.C. Passeron(1977), *Reproduction in education, society and culture*.
London: Sage.
- Certeau, M. de.(1986), *Heterologies*. Manchester University Press.
- Cooper, R.(1986), "Organization/Disorganization", *Social Science Information*, 25/2:
pp.299-335.
- Deleuze, G.(1983), *Nietzsche and philosophy*. London: Athlone Press.
- Deleuze, G., and F. Guattari(1983), *Anti-Oedipus: capitalism and schizophrenia*.
Minneapolis: University of Minesota Press.
- Derrida, J.(1973), *Speech and phenomena*. Evanston: Northwestern University Press.
- Douglas, M.(1970), *Natural symbols*. London: Barrie and Jenkins.
- Foucault, M.(1977a), *Language, counter-memory, practice*. Ithaca, N.Y.: Cornell
University Press.
- Foucault, M.(1977b), *Discipline and Punish: the birth of the prison*. London. Allen
Lane.
- Foucault, M.(1980), *Power/Knowledge*. Brighton: Harvester Press.
- Freud, S.(1961), "Civilization and its discontents" in *The standard edition of the
complete psychological works of Sigmunt Freud*, Vol. XX I , pp.57-145. London:
Hogarth Press and Institute of Psycho-Analysis.

- Gordon, C.(1980), "Afterword" in *Power/Knowledge* M Foucault. Brighton: Harvester Press.
- Gouldner, A.(1959), "Organizational analysis" in *Sociology Today*. R.K. Merton, K. Broom and L.S. Cottrell(eds), pp.400-428. New York: Basic Books.
- Habermas, J.(1972), *Knowledge and human interrests*. London: Heineman.
- Habermas, J.(1984), *The theory of communicative action I : reason and the rationalization of society*. Boston: Beacon Press.
- Hall, R.H.(1972), *Organizations: structure and process*. Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall.
- Hirschman, A.O.(1977), *The passions and the interests*. Princeton, N.J.: Princeton University Press.
- Hirschman, A.O., and C.E. Lindblom(1962), "Economic development, research and development, policy-making: Some converging views" *Behavioral Science* 7: pp. 211.222.
- Luhmann, N.(1976), "A general theory of organized social systems" in *European contributions to organization theory*. G. Hofstede and M.S. Kassem(eds.), pp.96-113. Amsterdam: Van Gorcum.
- Lytard, J.F.(1977), "The unconscious as *mise-en-scene*" in *Performance in postmodern culture*. M. Benamou and C. Caramello(eds.), pp.87-98. Wisconsin: Center for Twenties Century Studies and Coda Press.
- Lytard, J.F.(1984), *The postmodern condition: a report on knowledge*. Manchester: Manchester University Press.
- Lytard, J.F., and J.L. Thebaud(1986), *Just gaming*. Manchester: Manchester University Press.
- Mayntz, R.(1976), "Conceptual models of organizational decision-making and their application to the policy process" in *European contributions to organization theory*. G. Hofstede and M.S. Kassem(eds.), pp.114-125. Amsterdam: Van Gorcum.
- Merton,R.(1968), *Social theory and social structure*. New York: Free Press.
- Merton,R.(1976), *Sociological ambivalence*. New York: Free Press.

モダニズム、ポストモダニズムと組織分析 (1)

- Morgan, G.(1986), *Images of organization*. Beverly Hills, Cal.: Sage.
- Perrow, C.(1972), *Complex organization*. Glenview, Ill.:Scott, Foresman.
- Rorty, P.(1980), *Philosophy and the mirror of nature*. Oxford: Blackwell.
- Smart, B.(1983), *Foucault, Marxism and critique*. London: Routledge and Kegan Paul.
- Stallybrass, P., and A. White(1986), *The politics and poetics of transgression*. London: Methuen.
- Varela, F.J.(1979), *Principles of biological autonomy*. New York: North Holland.
- Whitehead, A.N.(1929), *Process and reality*. New York: Macmillan.
- Wiener, N.(1948), *Cybernetics, or control and communication in the animal and the machine*. New York: Wiley.